

調査報告：『どちなきりしたん』のキリシタン用語と『日本国語大辞典 第二版』

岸本恵実

1. 本稿の目的

16 世紀半ばから 17 世紀前半までのカトリック日本宣教においては、おもに教えに関する語について、ポルトガル語・ラテン語・スペイン語の原語を翻訳せず音写して日本語文中に用いていたことが知られている。本稿ではこれらをキリシタン用語と称する。キリシタン用語は、日本語史では外来語の一部として、表記、意味用法などの面から数多くの研究がなされてきた。

キリシタン用語は、日本のイエズス会が刊行したキリシタン版など 16・17 世紀に成立したキリシタン文献に使用されただけでなく、キリシタンを批判する排耶書や明治・大正期に創作された南蛮文学作品に採用された。また、しばしば転訛した形で潜伏キリシタンの間に伝えられた。その結果として、国語辞典類に立項されている語が少なくない。

キリシタン用語は日本語の一部であるとともに、キリスト教用語の一部でもあるので、国語辞典だけでなく『日本キリスト教歴史大事典』（1988、教文館）などキリスト教に関する辞典類にも採用されている。キリシタン用語の一覧としてはたとえば以下の書が知られる。

『日本キリスト教歴史大事典』（1988、教文館）付録「キリシタン主要洋語略解」

『日本史小百科キリシタン』（1999、東京堂出版）付録「キリシタン用語集」

『キリスト教用語辞典』（1954、東京堂）附録「キリシタン用語」

（下記は各書収録資料の用語のみ）

『キリシタン書 排耶書』（1970、岩波書店）「洋語一覧表」

『キリシタン文学双書』（1993～、教文館）各巻末「洋語一覧表」

キリシタン時代の文献と、現代の国語辞書、キリスト教用語一覧をつき合わせたときに、表記のゆれや合成語の区切り方、語釈以前に、立項の採否に違いが少なくないことが確認される。辞典は、どの辞典も独自の目的と編纂方針のもと作成されているから、立項・語釈のあり方が異なるのは当然のことである。ころみに、現代における最大の日本語辞典『日本国語大辞典 第二版』（2000～2002、小学館、以下「日国」と略記）に立項されたキリシタン用語を『どちなきりしたん』（1600 年長崎刊ローマ字本・国字本、1592 年天草刊ローマ字本、1591 年頃刊国字本）と比較したところ、『ぎやどべかどる』（1599 年刊）、『こんてむつすむんち』（1610 年刊）などのキリシタン版も多く引用されているが、『どちなきりしたん』1600 年長崎刊国字本がキリシタン用語の主要な典拠とされたことが明白であった。

そこで本稿では、『どちなきりしたん』のキリシタン用語を日国と対照させ、立項の特徴を明らかにする。本稿では立項に焦点を絞り、見出しの語形や語釈、用例については一部言及するのみとした。

2. 調査方法

使用資料 冒頭に本稿での略称を記す。

日国：『日本国語大辞典 第二版』（2000～2002、小学館） 項目 503,000。¹

「総項目数 50 万、用例総数 100 万を誇るわが国最大規模の国語辞典。」

（参照したその他の国語辞書）

時代別：『時代別国語大辞典 室町時代編』（1985～2001、三省堂） 項目 70,000 超。²

「室町期から織豊期に及ぶ約 200 年間の言葉を対象とし、室町時代を映す多彩な語彙を幅広く採録。」

大辞泉：『デジタル大辞泉』（ジャパナレッジ版、小学館） 項目 311,304。³

「現代日本語を中心に、カタカナ語、古語、専門語、故事・慣用句など 31 万 1,304 項目を収録。」

どちらな：『どちらなきりしたん』（1600 年長崎刊国字本） 小島幸枝編『どちらなきりしたん総索引』（1971、風間書房）

どちら前：『どちらいなきりしたん』（1591 年頃刊国字本） 亀井孝・小島幸枝解説『どちらいなきりしたん：バチカン本』（1979、勉誠社）、亀井孝・H.チースリク・小島幸枝『日本イエズス会版キリシタン要理』（1983、岩波書店）

（参照したその他のどちらナ）

ドチ後：Doctrina Christan.（1600 年長崎刊ローマ字本） 小島幸枝編『どちらなきりしたん総索引』（1971、風間書房）

ドチ前：Doctrina Christan.（1592 年天草刊ローマ字本） 豊島正之解説『ドチリーナ・キリシタン：天草版』（2014、勉誠出版）

調査方法

①『どちらなきりしたん総索引』によりどちらな本文のキリシタン用語、目視によりどちら前のキリシタン用語⁴を、日国ジャパナレッジ版の見出しと対照し、有無を調査する。表記のゆれがしばしばみられるが、語義から同一語と判断できる場合は有とした。

② ①の用語が、語釈に「キリシタン」および「キリシタン用語」を含むかどうか調査する。

3. 調査結果

どちらな本文に見えるキリシタン用語は、『どちらなきりしたん総索引』によれば付表 1 の 140 と、付表 2 の固有名詞 19、付表 3 のラテン語文のみに含まれる 10 がある。

これらのうち、付表 1・付表 2 の合計 159 を日国の見出しと対照させたところ、大きく (a)(b)(c) の 3 グループに分類された。付表 1・2 の語末に付した a, b, c はその分類を表す。以下に各分類の説明と用例を記す。例は日国の見出し・解説・用例の引用である。

¹ <https://japanknowledge.com/contents/nikkoku/> 続く内容説明も左記による（2025 年 5 月 5 日閲覧）。

² <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN00749131> 続く内容説明も左記による（2025 年 5 月 5 日閲覧）。

³ <https://japanknowledge.com/contents/daijisen/> 続く内容説明も左記による（2025 年 5 月 5 日閲覧）。

⁴ ドチ後・ドチ前の標題紙には collegio の語が使われているが、『どちらなきりしたん総索引』では標題紙から採られていないので、本稿でも本文中の語に対象を限定した。

(a) 立項されており、語釈に「キリシタン用語」または「キリシタン」の文言を用いてキリシタン用語と明示されている語⁵：102

例1

アグワ - ベンタ

〔名〕（{ポルトガル} *agua benta*）

キリシタン用語。聖水。

*どちりなきりしたん（一六〇〇年版）〔1600〕九「こうくはい（後悔）をもてびすぼのべんさんをうけ、あぐはべんたをそそき、むねをうち」

例2

カトリカ

〔形動〕（{ポルトガル} *catholica*（*catholico* の女性形））《カトーリカ》

キリシタンの人々が、自分たちの宗教を「正統的」なものとして用いたことば。

*どちりいなきりしたん（一五九二年版）〔1592〕六「スプリツサンチカトウリカにておはしますサンタエケレジヤを誠に信じ奉る」

(b) 立項されているが、語釈に「キリシタン」の文言がない語：33

「→」の左がどちりなの用語、右が日国の見出しである。+は用例にどちりなを引用している見出しを表す。

（付表1より）：16

あべまりや→アベ-マリア+ あめん→アーメン+ いであ→イデア+
かてきずも→カテキズム きりしと→キリスト くるす→クルス+
ごらうりや→グローリア+ さからめんと→サカラメント+（どち前）・サクラメント
さばと→サバト+ じゆでよ→ジュデヨ+（どち前） ばうちすた→バプテスト
ばうちずも→バプテスマ ぱん→パン+（どち前） ほるま→フォーム
みいさ→ミサ ろざいろ→ロザリオ

（付表2より）：17

あだん→アダム あばらん→アブラハム いざべる→エリサベツ
おりべて→オリーブ-さん がびりゑる→ガブリエル かるはりよ→ゴルゴタ
げれがうりよ→グレゴリウス じよあん→ヨハネ ぜつせまに→ゲッセマネ
ぜらうにも→ヒエロニムス ぱうろ→パウロ ぺいとろ→ペテロ
ぼんしよぴらと→ピラト まりや→マリア みげる→ミカエル
らうま→ローマ ゑは→エバ

⁵ すぴりつす（「スピリツ」は日国に有）、ぜらる（「ジュイゾ-ゼラル」は有）、へりや（「セスタ-へリヤ」は有）の3語を含める。

例 3

グローリア

〔名〕（{ラテン}・{ポルトガル} *gloria*）《ゴローリア・グロリア》

(1)キリスト教で、「栄光」また「栄光あれ」の意でいう語。

*どちりいなきりしたん（一五九二年版）〔1592〕二「其の所作はデウスのグロウリヤとなり奉る為なり」

*ぎやどぺかどる〔1599〕上・一・八「ぐらうりやと云、至りたる快樂」

*どちりなきりしたん（一六〇〇年版）〔1600〕四「御ははさんたまりや、てんじやうにをひてごらうりやの御かふりをいただき玉ふ事」

(2)ミサ通常文で司祭によって歌い出される最初の語。「神に栄光を」の意をもち、栄光の讃歌、天使の讃歌ともいわれる。死者のためのミサなどでは用いない。

(3)経（たていと）に絹糸、緯（よこいと）には梳毛（すきげ）糸を用いて斜文織りとした薄地の織物。傘地、婦人服地とする。

*モダン辞典〔1930〕「グロリア（装）絹毛交織」

例 4

ガブリエル

（Gabriel）

新約聖書では、マリアにイエス・キリストの誕生を告げた天使。ユダヤ教神学では、ミカエルに次ぐ大天使。イスラム教では、マホメットに啓示を告げた最上の天使とされる。

例 5

カテキズモ

〔名〕（{ポルトガル} *catechismo*）《カテキスモ》

「カテキズム」に同じ。

*どちりいなきりしたん（一五九二年版）〔1592〕六「カテキズモに載せたる事を読むべし」

*どちりなきりしたん（一六〇〇年版）〔1600〕一「かてきずもといふ初談議（しょだんぎ）のことはりよりほかにもきりしたんのしらずしてかなはざる事おほきなり」

(c) 立項なし : 24

うんさん ゑすてれま きりずま こんひるまん さるべ
さるべれじな さんちしも しえんしや すすたんしや せよ
せんちいどす ちもるでい ぢりぜんしや てよろがれす はしえんしや
びえだで べなべんつらんさ ほるたれざ

（このほか、以下の合成語および合成語の一部とみなせる語を含めた。）

きりしたんしゅ くるすのき さん さんた さんち さんちしも

単純に数字から見れば、立項のある(a)(b)は 159 のうち 135 であるから、どちらな本文のキリシタン用語は 8 割以上が日国に立項されていることになる。

立項されている(a)(b)のうち、すべての時代の日本語を対象とする日国の特徴がよく表れているのが(b)である。(b)の語は、固有名詞・非固有名詞ともに、例 3・例 4 のように近現代の見出しと統合されていることが多い。とくに固有名詞は近現代の表記に合わせられていて、どちらなと同じ人名・地名と判別しがたい場合が多くなっている。例 5 のように、語源のポルトガル語からキリシタン用語であることを推測させる場合もある。これらはキリシタン用語と明示されないが、語釈、用例、語源によってどちらなの語と同一とみなせる外来語である。(b)の例から、語釈の「キリシタン用語」「キリシタン」の語はひとつの目安であり必ずしも使用されていないこと、どちらなと異なる語形で立項されている場合があることがわかる。

(c)は、他のキリシタン資料における用例が稀なため立項が見送られたと思われるが、「こんひるまさん」（堅信）「すすたんしや」（実体）のように、教義上重要と思われる語もある。

立項が見送られた語に関して、1591 年頃刊行された国字本と 1600 年刊行の国字本の利用の相違についても述べておきたい。後期版は前期版と様々な点で異なっているが、キリシタン用語についても、改訂の結果、前期版のみに見られるものが少なくない。これらのうち、日国では「おびりがさん」「じびにだあで」「なつれざ」は採用されている。どちらのみに見られる語で日国に立項されていないのは「うまななつら」「すびりつあるどんゑす」など 20 ほどあるが、これらは他資料での用例が稀であり、立項の必要性は比較的低いとみなされたと考えられる。

4. まとめ

本稿の調査により、以下一・二のことが明らかになった。

一、日国では、『どちらなきりしたん』（1600 年長崎刊国字本）のキリシタン用語の大半が立項されている。

二、ただし、固有名詞など、近現代通用の語形と見出しが統合されている語が少なくない。

そして、本稿では扱えなかったが、調査の過程で下記のような興味深い点が観察された。いずれも今後の課題としたい。

(i) 日国とそのほかの国語辞典（時代別・大辞泉）の間で、立項および典拠選択の方針に差異が大きい。

(ii) 日国・時代別において、既成の日本語（漢語・和語）の語釈に、キリシタン特有の意味用法を記述した語が認められる。

付表1：どちらなのキリシタン用語（固有名詞・ラテン語文を除く）：140

あぐはべんた a	あちりさん a	あにま a	あべまりや b	あぼすところ a
あめん b	あるかんじよ a	あるたる a	あるちいご a	あんじよ a
いであ b	いんへるの a	うまにだで a	うみるだあで a	うんさん c
おすちや a	おらしよ a	おりじなるとが a	おるでん a	おれよ a
おんたあで a	かすちだあで a	かたうりか a	かてきずも b	がらさ a
かりす a	かりだあで a	かるちなれす a	きりしたん a	きりしたんしゆ c
きりしと b	きりずま c	くはれいずま a	くるす b	くるすのき c
けれど a	こむにあん a	ごらうりや b	ころは a	こんしいりよ a ⁶
こんしえんしや a	こんちりさん a	こんばにや a	こんひさん a	こんひるまさん c
こんへそる a	さからめんと b	さきりひしよ a	さしちはさん a	させるだうて a
さばと b	さびえんしや a	さるべ c	さるべれじいな c	さん c
さんた c	さんち c	さんちしも c	さんと a	さんとす a
しえんしや c	じゆいぞ a	じゆすちしや a	じゆでよ b	すすたんしや c
すぴりつ a	すぴりつある a	すぴりつさんと a	すぴりつす a	すperiよる a
ぜじゆん a	せすた a	せよ c	ぜらる a	せんちいどす c
ぜんちよ a	だうねす a	ちもるでい c	ぢりぜんしや c	ちりんだあで a
でうす a	てよろがれす c	てんたさん a	てんぺらんさ a	どちらいな a
どみんご a	なたる a	なつうら a	ばあてるなうすてる a	ばあてれ a
ばうちすた b	ばうちずも b	はしえんしや c	ばしよん a	ばすくは a
ばつば a	ばてれ a	ばらいぞ a	ばん b	ひいです a
ひいりよ a	びえだで c	びすぼ a	びるぜん a	びるつうです a
ふるがたうりよ a	ふるでんしや a	べあと a	べあとにち a	べなべんつらんさ c
べにある a	べにあるとが a	ぺにてんしや a	へりや a	べるさうな a
べんさん c	ぼてんしや a	ほるたれざ c	ほるま b	ぼろしも a
ぼろへえた a	まちりもうによ a	まてりや c	まるちる a	まんだめん a
まんだめんとす a	みいさ b	みすてりよ a	みぜりこるぢや a	めもりや a
もるたる a	もるたるとが a	りべらりだあで a	りんぼ a	ろざいろ b
ゑうかりすちあ a	ゑけれじや a	ゑすてれま c	ゑすぺらんさ a	ゑんてんぢめんと a

⁶ どちらなにおいて「公会議」「賢慮」の意味で用いられているが、日国があげている語義は「公会議」の方のみである。

付表 2：どちりなの外来語中、固有名詞：19

あだん b	あばらん b	いざべる b	おりべて b	がびりゑる b
かるはりよ b	げれがうりよ b	じよあん b	ぜずきりしと a	ぜずす a
ぜつせまに b	ぜらうにも b	ぱうろ b	ぺいとろ b	ぼんしよぴらと b
まりや b	みげる b	らうま b	ゑは b	

付表 3：どちりなの外来語中、ラテン語文のみに使用の語：10

いん	すぴりつすさんち	て	なうみね	ばあちりす
ばうちぞ	ひいりい	ぺてれ	ゑご	ゑつ